

「家族再結合」のリアリティ

—台湾からカナダに移住したフィリピン人女性と その子どもたちの経験から—

小ヶ谷 千 穂

アジア地域で移住家事労働者として働く多くのフィリピン人女性たちにとって、カナダは憧れの地であり、「段階的移動stepwise migration」(Paul 2017)の最終目的地でもある。その理由は、移動後に市民権を申請することが可能であり、さらには、フィリピンから家族を呼び寄せることもできる場所であるからだ。

移民研究において「家族再結合family reunion」は移住者の誰もが享受すべき権利の一つであり、「ゴール」としても考えられてきた。しかし「家族」内部の微細な権力関係、特に長期間離れて暮らしてきた家族における関係性の変化や緊張は長く不問に付されてきた。本稿では、台湾からトロント（カナダ）に移住し、その後子どもや夫を呼び寄せたフィリピン人女性たち、およびその呼び寄せられた子どもたちへのインタビュー調査から、「家族再結合」が内包する多様な課題について明らかにすることを目的とする。

1. はじめに

グローバルな現象としての「移動の女性化feminization of migration」(Castles and Miller, 1993)については、女性のトランスナショナルな移動やとりわけ送り出し家族に対する帰結について多くの研究が積み重ねられてきた。これらの研究の中には、母である移住女性(migrant mothers)と、その子どもたちとの「分離separation」を取り巻く困難さを強調してきたものがあるが(Parreñas, 2005; Pratt, 2012)、移動先の社会において、母子が「再結合reunification」を果たした際に一体どのような関係の変化が起こるのか、という点についての研究はほとんど見られないのが実情である。

本稿では、フィリピンからカナダのトロントに移住した、こうした移動する母親

たち (migrant mothers) (Yeoh and Huang, 1999) と、彼女たちに呼び寄せられた子どもたちの事例を取り上げ、母子がそれぞれ家族再結合に対してどのような期待を持ち、またその期待が、長期に渡る離れ離れの生活やカナダへの移住という文脈の中で、どのように齟齬を生じさせていくのか、といった点を明らかにしていく。

Colmmaら (2012) によれば、カナダにおけるフィリピン人移民についての研究はごく最近まで極めて限られていたという。しかし実際にはフィリピン人は今日のカナダにおける最大の移民集団の一つである。こうした研究の少なさを埋め合わせる、という観点だけでなく、移動する母親とその子どもたちとの離別と再結合をめぐる関係性を再検討するという目的を、本稿は持つ。具体的には、母親と子どもそれぞれが、多層的な文脈の中でどのようにそれぞれの感情や状況について語るのか、という点に本稿は着目する。

Nagasaka & Fresnoza-Flot (2015) は、「移動する子どもであること mobile childhoods」という概念を提唱しているが、本稿では、母親によって呼び寄せられた子どもたちのこうした「mobile childhoods」を、「移動する母親であること mobile motherhoods」と対比させながら議論したい。「トランスナショナルな母親業 transnational mothering」(Hondagneu-Sotelo and Avila, 1997; Parreñas 2005) や、「遠隔地母親業 distance-mothering」といった概念は、子どもを母国に残して海外就労しなければならない女性たちが、母親としてのケア役割を遠隔地から実践しているという現実、そしてその女性たちの多くが海外では雇用主の子どもの世話をする家事労働者の仕事をしている、という矛盾を説明してきた。本稿では、こうした「トランスナショナルな母親業」の概念をさらに超えるような、「移動する母親であること mobile motherhoods」の内実について、実際の移住女性の語りから考察を試みたい。

「移動する母親であること mobile motherhoods」という概念を通して考えたいことは以下の二点である。一つは母親であること motherhoods を、移住者である母親と、移動経験を持つ子どもとの具体的で継続的な関係性の文脈の中で把握すること。いま一つは、「移動する母親であること mobile motherhoods」と「移動する子どもであること mobile childhoods」とが相互関連的であることを明らかにすること、である¹。そもそも、Heidbrink (2014) や Nagasaka (2015) らが指摘するように、移民研究全般において「子ども」の視点や声を取り上げら

れてこなかったことが近年批判されている。これらの議論を踏まえて本稿では、母親のトランスナショナルな移動を、「移動する子どもであること」を理解するうえで重要な要素として、カナダの文脈で考察していく。

2. カナダのフィリピン人移民とLCP

フィリピンからカナダへの移民は一般的には1960年代に、アメリカと同様に主に医療関係者の流入を皮切りに開始したと言われている。以後、カナダはフィリピンの人々にとって、最も望まれる移住先の一つとなっている。現在カナダ在住のフィリピン人は約59万人で、中国、インドについて三番目の移民集団を形成している（The Canadian Magazine of Immigration 2018）。さらに、2015年の調べでは、フィリピンの主要言語であるフィリピン語（タガログ語）は、カナダの永住移民の間で最も話されている外国語（全体の15%）であり、それは中国語を抜いている（Government of Canada 2015）。2010年には、カナダへの新規移民の最大の送り出し国が初めてフィリピンとなった。歴史的に見ればカナダにおけるフィリピン人は、最近になって増えた移民集団であり、実際1970年以前に入国した人口は全体の5%に満たない。逆に、カナダ在住のフィリピン人の半数以上が、2001年以前の10年間の間にカナダにやってきた人たちである（Mcelhinny, et al. 2012: 8）。Mcelhinnyら（2012）は、カナダへのフィリピン人移民の流入パターンについて以下のように説明している。1950年代から60年代にカナダにやってきたフィリピン人はほとんどが専門職であり、看護師、医師、技術者や事務職が、カナダでの人手不足を解決するためにリクルートされた。こうした人々の多くはそれ以前にはさまざまな交換プログラムの下でアメリカ合衆国で働いており、アメリカでのビザが切れた後にカナダに移動したという。これが、カナダのフィリピン人移民の第1波であり、そのほとんどが永住移民となった。

しかし、1970年代後半には、サービス職や製造業従事者がより多くフィリピ

1 この点については、Parreñas (2005) も、トランスナショナルな母親業をめぐる研究は、子どもの視点を欠いている、と指摘している。

「家族再結合」のリアリティー台湾からカナダに移住したフィリピン人女性とその子どもたちの経験から一

ンからカナダに移動するようになり、専門職の人口は減少し始める。1978年にはカナダ政府が「家族再結合family reunification」というビザのカテゴリーを創設する。1974年にはフィリピン政府が新たに海外雇用政策を開始したことも相まって、カナダにおけるフィリピン人移民の構成は変化を始めた。そして1980年代に入ると、カナダ政府は新たにフィリピン人労働者を家事サービスの部門でリクルートするようになり、その後の「住み込みケアギバー・プログラム Live-in Caregiver Program (LCP)」につながっていく。

〈LCPとフィリピン人移民〉

「住み込みケアギバー・プログラムLive-in Caregiver Program (LCP)」は、それ以前の「外国人家事労働者受け入れForeign Domestic Movement (FDM)」に引き続いて1992年に開始された受け入れプログラムである²。1980年から2001年までの間に、LCPでカナダに入国した労働者の79.6% (3万2,474人中2万5,846人) がフィリピン人であったという (Santiago 2009)。2013年現在においても、フィリピン人はLCPで入国した移住労働者の大多数を占めているが、それはカナダのフィリピン人人口全体の11.6%となっている。

LCPがフィリピン人労働者、とりわけ母親たちにとって魅力的なのは、24カ月住み込みで就労した後に、カナダでの永住権 (Permanent Residence: PR) に、自分自身だけでなく、扶養家族全員も同時に申請することができる、という点にある。また、外国での就労経験が、LCPの申請にあたっての条件となる介護労働の技能 (skill) 訓練と同等とみなされる、という点も移住女性たちにとっては好都合であった。というのも、中にはフィリピンから直接カナダを目指す者もいるが、多くはシンガポール、台湾、香港や中東諸国などで働いたのちにカナダにやってくる、という事実がある³。Pratt (2012) によれば、2007年にはカナダはイタリアを抜いて年間の新規雇用の海外フィリピン人労働者 (Over-

2 その後、2014年にカナダ政府はLCPに代わって、新たにCaregiver Program (CP) を設置した。CPは、子どものケアと、医療ニーズの高い人へのケア、の2つに分かれており、住み込みが義務付けられてはいないが、LCPとは異なり、2年間のプログラム終了後に永住権に申請するためには英語かフランス語の語学試験が義務付けられるなどの条件が新たに付されている (Banerjee et.al.2017)。Paul (2017) は、その影響についてはまだ明らかになっていないと述べている。

seas Filipino Workers: OFWs) が最も多い国になっており、2009年には新規雇用の介護労働者に関しては、台湾に次いで第二位となっている (Pratt 2012: 8)。台湾とカナダが、フィリピン人介護労働者の二大目的地となっている、という事実は、後述するように本稿が取り上げるケースがいずれも台北からトロントに移動した人たちであり、フィリピン人移住労働者の近年の傾向を反映している、ということを示している。

このように、多くの移住女性労働者たちがカナダに来る以前に異なる国で就労していることから、移動する母親とその子どもたちとの分離の期間は、多くの場合、母親のカナダ滞在期間よりもかなり長いものになっている。このことはつまり、母親たちは遠隔地母親業を避けられない状況として経験している、ということの意味している。通常、子どもの呼び寄せ手続きには、必要な書類の準備なども含めて5年から7年が必要だと言われており、この手続き自体が、LCPの期間を終えた母親たちにとって大きな「プロジェクト」であり、またそれが母子の分離期間にも追加される、ということがわかる。こうして手続き期間においても分離が継続することによって、家族再結合に対する母親たちの期待は、ますます蓄積されていく。他方で子どもたちは、幼い時期を母親不在で過ごす、ということが延長されていき、その間多くの場合は父親や祖母によって養育されることになるのだ。

3. 本研究の対象と方法

本稿での主要な研究対象は、台北（台湾）で家事労働者として働いた後に、上述のLCPプログラムでトロント（カナダ）に移住してきたフィリピン女性たちである。本研究は、一種の複数地エスノグラフィー (multi-sited ethnography) 的手法を用いている。筆者が本研究の対象者たちと初めて出会ったのは2002年から2004年にかけて、台北においてであった。それ以来、最初は手紙、その後はe-mailで折に触れて連絡を取り合っていた。当時は台湾での滞在期限が5年までと定められていたため、その後女性たちの中からカナダに移る人が出てき

3 こうした、段階的に複数の国での就労を行う移住家事労働者の移動を、Paul (2017) は「段階的移動 Stepwise Migration」と名付けている。

た。そして、筆者が2009年から2011年、2013年とそれぞれ調査のために8月～9月にかけて約3週間ずつトロントに滞在し、彼女たちとその呼び寄せられた子どもたちにインタビューを実施した。このようにトロントでの調査期間はきわめて限られていたため、本研究における観察やインタビュー・データもまた限定的である。しかしながら、移動する母親たちのトランスナショナルな軌跡は10年にわたってフォローしてきている。トロントに移る以前、女性たちは台北で移住者のエンパワーメント活動においてきわめてアクティブなメンバーであった。彼女たちは積極的にフィリピン人家事労働者のコミュニティを組織化し、台湾人のソーシャル・ワーカーや教会関係者とも常に連携し協力していた。中には、地元の新聞に投稿を重ねていた人もいた。本研究でのキー・インフォーマントはいずれも、LCPの2年間で終了し、その後に永住権と家族の呼び寄せを申請し、その後家族がカナダに定住している。2011年の時点で彼女たちはいずれも、トロントの住宅街に心地よい戸建て住宅を借り、ベビーシッターや清掃、個人家庭での家事労働や介護労働などの仕事に従事していた。中にはオフィスの清掃の仕事をしている者や、シングルで事務職員として会社勤めをしている人もいた。

〈「台北ネットワーク」の特徴と現在〉

移民研究においては、ネットワークが果たす役割が常に指摘されてきたが、そのほとんどは、出身地や出身村を起点とする家族やコミュニティに基づくネットワークが人々の継続的な移動を支援し促進する、という議論であった (Massey 1987; Hondagneu-Sotelo, 1994; 長坂2009)。しかしながら、本稿が対象とする移住女性たちの場合は、カナダへの移動のためのネットワーク自体が、台北という海外就労先から発生している。そのため、本稿ではこのネットワークを「台北ネットワーク」と呼ぶことにしたい。「台北ネットワーク」の女性たちは、フィリピンではそれぞれ出身地が異なっており、台湾に来る以前にはもちろん面識がなかった者同士である。彼女たちは台北で知り合って友人関係となり、ネットワークが形成され、それがその後のカナダへの彼女たちの移動を促すことになったのだ。ネットワークのメンバーの1人がトロントに移動した後、雇用主についてのデータ、雇用許可証 (Open Work Permit) や永住権申請、

家族呼び寄せのための手続きや手数料などについての一連の情報が、ネットワークを通して伝達され、次々と台北での契約期間を終えた女性たちが、トロントにやってきた。トロントに到着し、2年間の住み込み期間を終えた現在、彼女たちは今同じコンパウンドにそれぞれの家族と一緒に暮らしている。家族がフィリピンから到着した後は、その家族メンバーも含めて交流は続き、新たに家族の雇用や学校についての情報交換はもとより、近所でのガレッジ・セールの情報や、交通機関についての情報など日常的な情報がやりとりされている。

また、呼び寄せられた子どもたちや夫たち同士も、「台北ネットワーク」を通じて関係を深めている。特に子どもたちは、ほとんどの親が仕事に出かけている放課後を、一緒に過ごしていた。互いの家を行き来し、ニックネームで呼び合いながら一緒に遊んだり出かけたりするこうした子どもたち同士の関係は、フィリピンでのきょうだいやいとこ関係に類似している。これらのことから、「台北ネットワーク」が、移住女性たちにとってだけでなく、彼女たちの家族にとっても、サポートを提供する重要なネットワークになっていることがわかる。さらに、呼び寄せられた子どもたちが自身の、たとえばカナダの学校で出会った友人たちのネットワークがさらに「台北ネットワーク」につながり、拡大していつている。このように本研究の対象者たちのネットワークは、従来の移民研究が発見してきた、出身社会に根差した移住ネットワークではなく、トランスナショナルな移動のプロセスそのものの中から生まれてきたネットワークであり、それがその後呼び寄せられた家族たちへのサポート・ネットワークとして機能している、という特徴を持っている⁴。

〈研究方法〉

本研究自体も、この新しいタイプの移民ネットワークの存在によって実現したものである。筆者はトロントにおいて、台北で知り合った女性たちから、新たに移住女性とその子どもたちを紹介され、「台北ネットワーク」を通じて7人の女性（シングル女性と、カナダに移動後に結婚した女性を含む）と、12人

4 Paul (2017) も、段階的移動において、こうしたネットワークが「資源 capital」として機能していることを指摘している。

の若者にインタビューをすることができた。インタビューのための予備的調査として、時間的な制約はあったものの、4年にわたって筆者は「台北ネットワーク」の人々のさまざまなイベントに同行したほか、若者たちとだけ街に出かける、などの関係性を続けながらインタビューを実施した。インタビューの対象となった若者たちは全員が学校に通っており、小学生の1名を除いて全員がトロントで何らかの形で働いた経験を持っていた。また、女性と子ども・若者たちへのインタビューのほかに、カナダで暮らすフィリピン人の若者の問題について取り組んでいる最も古いNGOも訪問し、スタッフから話を聞くことができた⁵。

以下、本論に入る前に、本研究における3名のキー・インフォーマントの女性たちのプロフィールを簡単に紹介しておこう。なお、以下での名前はいずれも仮称であり、年齢はいずれも調査の最終年にあたる2013年9月時点のものである。

〈ジェイン〉

ジェインは53歳で、1999年から海外で働いている。台北では3年間、その後はトロントでそれぞれ介護の仕事をしてきた。フィリピンでは工場のスーパーバイザーをしていた彼女は、4人の子ども（28歳、27歳、19歳、16歳）全員をすでにカナダに呼び寄せている。そのうち2人はフィリピンで結婚しており、19歳の娘はトロントでヨルダン人の男性と2013年に結婚した。2002年にカナダに来たジェインこそが、台北ネットワークの中心人物である。ネットワークの中で最初にカナダに来たジェインが、後続の女性たちにさまざまな書類の手続きを指南し、住居に関する情報から休日のイベント情報まで、あらゆる情報を提供したのだ。

〈レミイ〉

レミイは35歳で、フィリピンでは協同組合の事務職員をしていた。その後11年間、海外でベビーシッターや介護労働者として働いてきた。台北に着いて6

5 インタビューは2011年9月にKCC (Kabayan Community Center) スタッフに対して実施した。

カ月で最初の雇用主が死去したため、一度フィリピンに帰国し、新たに台湾でベビーシッターの仕事を申請しなおさなければならなかったという。その後、台北で3年間働いた後、カナダへのビザを取得し、2004年にトロントに移動したレミイだが、その直前に2か月間出身地のダバオに帰国し家族と過ごしたという。その後2010年に、当時10歳だった1人息子のケニーと夫をカナダに呼びよせることができた。レミイが初めて海外就労に出た時、ケニーは2歳であった。そのため、ほとんど二人は一緒に生活をしたことがなく、2006年に6週間の休暇でフィリピンに帰国した際にはすでにケニーは6歳になっていた。2013年時点でレミイはパートタイムでベビーシッターの仕事をしている。

〈ジーナ〉

ジーナはフィリピンで専門職として働いており、台北の移住労働者コミュニティでも積極的に活動し、また新聞への投稿や詩の創作など文学的な活動にも熱心だった。ジーナには2人の息子がいて、2011年の時点では、彼女は息子たちと夫の呼び寄せ手続きをとっている最中であり、2013年には、すでに家族とヴァンクーヴァーで暮らしている自分の兄のところに移動する計画を立てていた⁶。

4. 「移動する母親である」こと：夢、期待、不安、ケアの負担

〈子どもとの分離の経験〉

上述したように、本研究の対象となった女性たちは台北の移住労働者コミュニティで活発に活動していた人たちであり、また文章表現も頻繁に行っていた。彼女たちの書く文章や詩のテーマは常に家族、特に子どもたちに関わるものであり、悲しみに満ちた思いが表現されることが多かった。彼女たちが台北でコミュニティ活動や教会・NGO活動に積極的に関与していたことは、ある意味で、遠く離れた子どもたちに会えない苦しみや、「母親であることmotherhoods」の一種の代替行為であったとも読み取れる。台北にいた当時は本人たちはそうは

6 その後、息子たちと夫の呼び寄せがかない、2018年現在、ジーナは自分の家族とヴァンクーヴァーで暮らしている。

「家族再結合」のリアリティー台湾からカナダに移住したフィリピン人女性とその子どもたちの経験から一

感じていなかったようだが、トロントに移動し、子どもたちを呼びよせた後に、そのことに気づいたという。実際彼女たちは、子どもたちがトロントに到着した以降は、台北でのようなコミュニティ活動に関わってはいない。もちろん頻繁に仲間同士で集まってはいるが、それはほとんど家族や友人としてのパーティやピクニックなどであり、台北時代の移住労働者の権利についての勉強会、といったものとは明らかに性質が異なっている。

台北ネットワークの中心人物であり、4人の子ども全員をトロントに呼び寄せ終えたジェインは、これまでの経験を次のように振り返る。

台北では忙しくなかったの。でも、自分で自分を忙しくさせてたのよね。うまくやっていたように。だって〔台北での〕最初の年は、毎日泣いてばかりいたから。泣こうと思って泣いていたんじゃないくて、涙が止まらなかった、。

カナダに来てからもずっと泣き続けてたけど、子どもたちが来てからは、涙が止まったの。でも、私がフィリピンを離れた時に子どもたちが泣いていたことを思い出すと……ああ……。

ジェインの語りからは、彼女にとって子どもたちとの再結合を果たす、ということがどれほどの重みを持っていたかがわかるだろう。上述したように、移住女性たちが家族を呼び寄せられるようになるまでには、法的な手続きと金銭的な準備も含めて数年がかかる。それゆえに、それは彼女たちにとってきわめて「大きなゴール」となるのだ。

〈家族再結合による達成感と現実〉

ジェインはまた、ほかの家族の例を引きながら、いかに自分が自分の家族を大切にしているのか、を強調した。

うちの子どもたちに、こんな風に言う人たちもいるのよ。
「きみたちはラッキーだ、きみたちとお母さんは同じ家に暮らしているんだから」って。

「家族再結合」のリアリティー台湾からカナダに移住したフィリピン人女性とその子どもたちの経験から

私は子どもたちにこう言ってるの。「週末には仕事を入れないでね。金曜の夜とか土曜日に出かけて楽しむのは自由。でも、日曜の朝には必ず家において、一緒にご飯を食べよう。日曜日はファミリー・デーなんだから」って。もちろん、食べてるときの携帯電話は禁止（笑）

しかし実際には、「台北ネットワーク」のほかのメンバーの話によると、ジェインたち家族（夫は後述するように、フィリピンに残っており呼び寄せられていない）は、全員で家で過ごすということはほとんどないという。筆者がインタビューした、フィリピン人家族の問題に長年かかわっているフィリピン人ソーシャル・ワーカーは、子どもたちを呼び寄せた後に親たちが子どもを十分に監督する時間がないことが問題だ、と批判的な評価をしていた。それは、カナダでの家族生活を経済的に維持するために親たちが働かなければならないからである。親子間でのコミュニケーション不足は、トロントに移住してきたばかりのフィリピン人移民に共通する問題だ、と別なNGOワーカーも語っていた。しかしながら、こうしたNGOの言説以上に、現実はいよりの複雑である。

〈再結合への恐怖と、ケアの負担〉

移動する母親たちが必ずしも、子どもとの再結合を単純に心待ちにしているわけではない。10年間息子たちと離れて暮らしていたジーナは、家族とまた一緒に暮らすことについて—そしてそのことを彼女自身が長きにわたって待ち望んできたのだが—の不安を次のように語った。

正直、少し怖い気持ちもあるの。だって、私がフィリピンを離れた時とまったく同じではないでしょう？あの頃あの子たちはほんとに小さな子どもだったから、私はただ、ああしてこうして、と言えよよかった。だってあの時、長男は6歳で、次男はほんとに赤ん坊だったんだから……。

でも今は上が16歳で、下が12歳。自分たちの生活があるでしょ。そのことについて、いつも考えてるの……。ここ [カナダ] では、誰もがアジャストしないとイケない。一つの家族としてアジャストしないと……。私だって、アジャストし続けてるわ。

いつも自分自身に問い続けてるの。子どもたちと夫に、こっちに来るように言ったのが、本当によかったのかな、って。いつも不安に思ってる。

子どもたちに対して、どういう風に、“母親であれば (be mother)” いいのか、わからないの。[離れていた] 10年……ずいぶん長い時間よ……。

ジーナは「トランスナショナルな母親業」(Parreñas 2005)を勤め続けてきたわけだが、それでも「実際にそばにいる」母親、としての役割を果たすことに不安を感じていた。つまりこれは、彼女にとって10年間の分離を経ての子どもたちとの再結合が、一種の「ケアの負担」になっていたと言えるのかもしれない。こうした家族再結合に伴う「ケアの負担」は、経済的な側面も持っている。LCPでの2年間の住み込み労働を終えた母親たちは、多くの場合パートタイムの仕事を複数掛け持ちすることになる。こうした状況について、子どもと夫をカナダに呼び寄せたレミィは次のように語った。

もちろん、息子と夫に対する私の義務は、前よりずいぶん大きくなった。前よりっていうのは、あの人たちがまだフィリピンにいた時と比べて、という意味ね。だって、今は仕事が終わったらすぐに家に帰って、家族のためにごはんを作ったり、家のことをしないといけないでしょ。前 [= 家族を呼び寄せる以前] みたいに、自分の好きな時間に帰宅したりできないのよ。前は、帰る時間も自由だったし、なんでも欲しいと思うものをすぐを買えたわ。でも今は、そうはいかない、。家族のためにお米を買うことを考えないといけないの。そうね、支出は大きいわよ。だってたくさん使うもの。食べ物や日用品なんかね。以前に比べても大きな金額になるわよ。

レミィの「ケア負担」は、時間とお金の両方の点において、彼女の自由が制限される、という形で現れ、それは彼女のそれまでのカナダでの日常生活における優先順位を変化させた。ここに、家族再結合に伴う移動する母親たちの、夢と不安、そしてケア負担という現実とが織り交ざっている様子が見て取れるだろう。家族再結合は母親たち自身によって、「理想の母親」となるために長い間待ち焦がれられている。しかし、夢にまでみたこの「ゴール」は、彼女た

ちの移住労働者としての現実と、時として衝突するのである。

「トランスナショナルな母親業」という概念は、母国に残された子どもたちに対して母親たちが遠隔地から母親としてのケア役割を果たす、という実践を示してきた。しかし、本研究でのケースからは、子どもたちとの再結合を果たした後も、「母親であることmotherhoods」は決して安定的なものになるわけではなく、常に「不在の母親absent mother」であった、ということに基づく複数のプレッシャーの下に母親たちが置かれていることがわかる。つまり「母親であることmotherhoods」もまたモビリティの中に埋め込まれており、同時に子どもたちの「移動する子どもであることmobile childhoods」と混ざり合い、それを反映しているのである。次節では、この点について考察していく。

5. 移動する子どものまなざしと経験：母親の意思決定と自分の人生とを交渉する若者たち

移動する若者には、家族再結合のプロセスはさまざまな形で異なって経験されている。

14歳の時にトロントに来たアリス（16歳）は、3人きょうだいの長女である。母親のフィオナはカナダでLCPの下で働く以前はキプロスで家事労働者として働いていた。アリスは、母親が初めて海外に行った時のことを正確には覚えていないが、母親とはずっとインターネット・チャットでコミュニケーションをとっていたという。そうやって維持されていた母親との関係は「OKだった」とアリスは言う。

しかし、母親が彼女ときょうだい、そして彼女の父親をカナダに呼び寄せることを決めた時に、アリスは「悲しい」と感じた。その理由は、彼女の村にいる親しい友人たちと別れなければならないからだった。それに、「新しい生活を始める」ということも、カナダに行くにあたって彼女が快く思わなかったことこの理由だという。「アジャストするのが難しいから」とアリスは言う。

しかし同時に、8年間離れて暮らしていた母親と再び一緒になれることについては幸せに感じたともいう。下のきょうだいたちはどうだったろうか、という質問に対してアリスは、きょうだいたちは幼すぎて、村を離れるということ

の意味を分かっていなかったと思う、と話していた。

現在アリスは、カナダでの学校生活を楽しく感じているようだ。学校には同じフィリピン移民の友人のほかに、もちろん白人も、そしてカナダ生まれのフィリピン人もいるという。同時にアリスは、Facebookを通じてフィリピンの村にいる古い友人たちとも、深夜や週末に連絡を取り合っているという。トロントに来て3年が経過した彼女は、自分とフィリピンとの関係について次のように語った。

フィリピンには“休暇で”戻りたいと思います。でも、暮らす、という意味ではないかな……だって、向こうでの生活は大変だから。お米の値段は高いし。

ここカナダではそんなに高くないし、ここでは勉強ができて、私にとっての未来（future）があるから。

フィリピンを離れてカナダで生活することについてのアリスの複雑な感情は、徐々に変化し、今の彼女の語りは、子どもたちをカナダに呼び寄せた母親のそれとほとんど同じようになっている。当初のアリスは、古い友人との関係と、母親との関係との間で板挟みになっているように感じていたという。しかし、トロントでの彼女の経験は、フィリピンに対する彼女の考えを少しずつ変化させてきている。

〈母と娘で異なる現実〉

家族再結合のプロセスは、移動する母親とフィリピンに残ったその夫との関係、そして呼び寄せられた子どもたちとその父親との関係にも、それぞれ異なった影響をもたらす。

前出のジェインはフィリピンに夫だけを残している。彼女によれば、彼女と夫は、「事実上、もう別れている」という。夫との関係について、ジェインは次のように語った。

子どもたちがみんなフィリピンにいた時には、私はお金を送り続けたわ。でも、今はみんなここに、カナダにいる。だから、もうフィリピンにお金

は送ってないの。私たち [=彼女と夫] は、ただの友達だから……

夫は今も[フィリピンの]“私の”家に住んでるのよ！強調するわね、“私の”家、よ！彼はほんとにラッキーよ。あそこにただで住めるなんて。今私は、ここ [=カナダ] で第二の人生 (second life) を送ってるの。

このことから、ジェインがすでにフィリピンには送金をしていないことがわかる。また、トロントで新たなパートナーを得ている彼女は、カナダでの生活を「第二の人生second life」と呼んでいる。しかし、ジェインの娘にとっては、自身の父親との関係は現在でも続いている。娘は週に2度はフィリピンにいる父親に電話をかけており、母親が止めてしまった送金も続けているのだ。ジェインの娘であるナネッテは、姉と一緒に、父親を休暇のためにトロントに呼び寄せたいと計画している。ナネッテは次のように話した。

父は優しい人なんです。母はずっと家にいなかったけれど、父はいつも私たちと一緒にでした、、、。たぶん私たちきょうだいは、父親とのほうが親しいと思います。もちろん、母親とも親しいけど、父とのほうがもっと近い。だって、彼に育てられたから、、、。なので、父から、私たちがいなくて寂しい、と聞くと悲しいです。

ナネッテの口から両親の関係について語られることはなかったが、もちろんか彼女は両親がすでに「ただの友達」であることを知っている。ここに、母国に「残された家族left-behind family」に対する母と娘の態度の違いが見て取れる。

前出のアリスのケースでも、カナダで家族再結合を果たした際に両親の関係は良好なものではなかったという。インタビューの中でアリスが具体的に父親について言及する場面はなかったのだが、アリスの母親は筆者とのインタビューにおいて、彼女と夫との間に「問題」があることをほのめかし、常に「夫」について言及する際には、引用符のジェスチャーを交えていた。長期間の分離を経て再結合した家族は、夫婦関係においても不安定な要素を抱えていると言える。

〈自分自身のネットワーク〉

第3節で述べたように、本研究が対象とするケースは、新しいタイプの移民ネットワーク—出身地フィリピンを起点とするのではなく、トランスナショナルな移動のプロセスを通して生成したもの—を展開してきた。トランスナショナルな移住者である母親たちがそのネットワークを作り出し、それを家族のためにも利用してきた。家族再結合後も、呼び寄せられた子どもたちはそのネットワークに深く依存し、お互いをカナダでの親戚のようにみなしている。そうした「台北ネットワーク」の中にいる高校生のアニーは、既出のナネットとほぼ同時にカナダに到着した、ナネットの親しい友人である。ナネットが休暇のためにフィリピンに帰国した際には、アニーは大変寂しがり、Facebook上で、ナネットがいないと毎日の生活が空っぽだ、と書き込んだほどだった。ティーンエイジャーらしいセンチメンタリズムがあるにしても、アニーとナネットとの関係は非常に親密で、彼女たちの友情、あるいは疑似親族関係とも呼べるような近い関係は、母親たち同士の結びつきを凌駕している。母親たちの間で生まれたネットワークが、徐々に、その娘たち同士のものへと変化しているのである。

〈カナダでの経済的自立の意味〉

ジェインの娘のナネットは、トロントで高校に通っている間、その後中退して結婚するまで、パートタイムで仕事をしていた。ナネットはカナダでの生活について次のように語った。

私は「トロントでの生活が」好きよ。フィリピンにいた時より好き。だって、ここでは自分の人生を生きてる、って感じだから。

フィリピンにいた時は、お金がなくなるとすぐに母に電話して、「ママ、お金が要るの」って言った。ここでは自分で働かなきゃいけないし、働いて自分のお金を持てれば楽しめる。だって自分のお金なんだもの。フィリピンでも楽しかったけど、ただ“tambay-tambay”（何もせずにぶらぶら待っている、の意）してただけで、本当に楽しいわけじゃなかったと思う。本当に楽しみたければ、ここでは自分で手に入れなきゃいけないの。

既出のNGOスタッフやソーシャル・ワーカーが話していたように、トロントに母親との家族再結合のために来た10代の若者たちの多くは、自分自身の小遣いを稼ぐためにパートタイムの仕事に就く。すなわち、若者たちにとってカナダにやってくることは、同時に、部分的ではあるが経済的自立を手に入れることを意味するのである。

母親と同じように、ナネットもフィリピンにいる友人やいとこから自分への経済的期待に直面している。

うん、母と一緒に休暇でフィリピンに帰ろうと思ってます。だから、こっちで仕事を持たないと。フィリピンに帰ったら、たくさんお金を使わないといけないでしょ。だって、友達やいとこたちが言うのよ。“これ買って、あれ買って！”って。みんな私たちがお金持ちになったと思ってるのよね……

みんな、ここでの生活の大変さを知らないの。ここは大変……ホームシックとか、フィリピンでのいろんなことが恋しいし。

パパと会えないのは寂しい。フィリピンも恋しい。でもここ [=カナダ] には未来があるから。もうこっちで大きくなったみたいな感じよ。こっちでいい感じで大人になっていってる……

ナネットはカナダでの生活は、毎日が忙しいだけで退屈だ、とも話していた。しかし、フィリピンの友人やいとこたちには決してそういう話はしないという。こうした「二つの顔」を持つ戦略は、海外フィリピン人労働者がしばしば経験するものである。彼ら・彼女らは海外での困難を、フィリピンにいる家族や友人には隠そうとする。その意味で、トランスナショナルに移動してきた母親たちの経験は、その子どもたちの中に再生産されていると言える。ナネットがトロントで手に入れた経済的な自立は、長きにわたる母親の海外送金への依存からの自立でもあった。しかし、今度は彼女自身が、友人や親せきたちの経済的な依存を引き起こしているのである。

〈「移住者の子ども」から「移住者」へ〉

Boehm (2011) らは以下のように論じている。

「親たちは子どものために、子どもと家族のよりよい将来を作るために頻繁に移動する。そして、その子どもや若者とみなされきた人たちが一母国においても、あるいは移動先での新しいコミュニティにおいても一移動者となっていく。彼らは幼児から若者まで、文化的に特定の概念である“若者”と“大人”の間を移動するのだ。人の移動の流れにおいて、子どもや“子どもであること／子ども時代childhood”に着目することは、親と子ども自身が“子どもであることchildhood”にますます関与し、積極的にそれを構築していく姿を明らかにする」
(Boehm et al. 2011: 3)

ナネットのケースの場合、彼女自身は海外出稼ぎ労働者になっていきながら、同時に移住者の子どもとしての経験もしている。これこそが、フィリピンで一定の年齢まで育った後にカナダに移動した1.5世代の現実であろう。すでにティーンエイジャーである彼女たちは、働いて自分の収入を得ることができる。このことが意味するところは大きく、時には母親とまた一緒に暮らせる、という事実よりも大きな意味を持つ場合もあるのだ。

移住者の子どもたちは、また違った形でも「自立した移住者」であることを強えられる。送り出し国フィリピンの特徴として、政府が海外雇用を促進しているという点があるが、海外雇用だけではなく、結婚移民や若者世代の移民などあらゆる形態での自国民の出移民に対しても政府が積極的に関与していることも、特徴的である（小ヶ谷2016）。母親にカナダへと呼び寄せられる若者たちは、海外フィリピン人委員会（Commission on Filipinos Overseas: CFO）という政府機関が実施する半日の渡航前オリエンテーションに参加することを義務付けられている。渡航前オリエンテーションでは、移動先の国についての一般的な情報提供や、アドバイス、重要な連絡先などが伝えられる。筆者は2009年9月にマニラでこのオリエンテーションを参与観察した。オリエンテーションで特に印象的だったのは、講師であるソーシャル・ワーカーが、「カナダに行くことのできるきみたちはラッキーだ」と繰り返し参加した若者たちに言っていたことであった。しかしまた、「カナダ社会に溶け込むのもまた、きみたち自身だ」という点も、同時に強調されていた。誰からの支援も期待せずに移住者は自分自身で生き残っていかなければならない、という点が示唆されていた

のだ。このように、カナダでやっていくための自己責任を強調するディスコースは、海外雇用政策を積極的に「促進」するのではなく、あくまでも海外労働を「よりよく管理manage」することが政府の役割だ、とする政策ディスコースと類似している（小ヶ谷2016）。

移動する若者／子どもたちは、移民の「子ども」でもある。しかし彼ら自身がまた、送り出し社会の文脈においては、移民や海外労働者でもあるのだ。語りからみたように、しばしば若者たちは、自分自身を事実上の移住労働者として構築している。しかし、彼ら・彼女らは常に、母親たちにとっては、「子ども」である。トランスナショナルな移動を続けてきた母親たちは、自分の子どもたちがすぐに経済的なアクターになることを当初は期待せず、むしろカナダで教育を受けて将来的によいキャリアを持つことを願っている。よりよい教育のためにカナダに子どもたちを呼び寄せたい、という母親たちの長年の夢は、子どもたちの現実と時には衝突するのである。

6. 結びに代えて

多くの場合8年から10年ほど子どもたちと離れて移住家事労働者や介護労働者として働かなければならなかった、移動する母親たちにとって、子どもの存在は、家族再結合後も彼女たちの生活の中心にある。彼女たちは、子どもたちと再び一緒に暮らすことを夢に見、期待し、そして不安も抱える。再結合そのものが、何年も離れて暮らしてきた母親たちに「ケアの負担」をさまざまな形でもたらしもする。こうした文脈の中で、トランスナショナルに移動する母親たちの「母親であることmotherhoods」は、一連の複数のモビリティの中に常に埋め込まれていた。それは、子どもをフィリピンに残して働く海外出稼ぎ者としての移動、複数の国を横断しての（本研究の場合は、台湾からカナダ）トランスナショナルな母親業の実践、そしてついに子どもと再結合できたものの、母親としてのケア役割について不安とアンビバレントな気持ちを抱える母親、といった複数の「motherhoods」であった。こうした彼女たちの経験を、ここでは自分自身と、子どもたちそれぞれの複数のモビリティに継続的に囲まれ埋め込まれているという点において「移動する母親であることmobile motherhoods」

と名付けたい。

他方で、移動する子どもたちについては、フィリピンにいた時にも、そしてカナダにやってきた後でも、常に彼ら・彼女らの存在を、母親との関係においてのみだけとらえることはできない。彼ら・彼女らは母親からの期待と、友人関係をはじめとする「自分自身の世界」との間で交渉しなければならない。また子どもたちは、フィリピンとカナダそれぞれで暮らす親たちとそれぞれ異なった関係を持ち、それぞれとうまくバランスをとりながら関係を維持している。そこに、さまざまな意味を持ちうる、カナダでの経済的自立が重なる。

家族再結合は、トランスナショナルに移動する母親たちにとってのゆるぎないゴールでもなければ、その子どもたちにとってのハッピーエンドでもない。それはむしろ、親子の間で時間の経過とともに常に交渉され、構築され、同時に試されていく過程であると言えるだろう。mobile childhoodsとmobile motherhoodsが交差する時、「家族」や「再結合」といった概念もまた、再構築されていくのである。

※本稿はOgaya (2015) に加筆修正を加えて改稿したものである。本研究は科学研究費（基盤B）（2009年～2012年）「移民第1.5世代の子ども達の適応過程に関する国際比較研究—フィリピン系移民の事例」（研究代表者・長坂格）および、科学研究費（基盤B）（2012年～2014年）「フィリピン系移民第1.5世代による社会生活の構築に関する比較研究」（研究代表者・長坂格）による研究成果の一部である。この場を借りて、トロントでお世話になったすべての皆さん、および「1.5世代」科研の共同研究者の皆様にお礼を申し上げます。

【参考文献】

- Banerjee, Rupa, Philip Kelly, Ethel Tungohan, GABRIELA-Ontario, Migrante-Canada, Community Alliance for Social Justice (CASJ) 2017, *Assessing The Changes to Canada's Live-in Caregiver Program: Improving Security or Deepening Precariousness?*, Pathways to Prosperity Project.
- Boehm, D., Hess, J.M., Coe, C., Rae-Espinoza, H. & Reynolds, R.R. 2011. "Children, Youth, and the Everyday Ruptures of Migration", in Coe et al. *Everyday Ruptures: Children, Youth, and Migration in Global Perspective*, Nashville: Vanderbilt University Press.
- Castles, S. and Miller, M.J. 1993 *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*. London: Macmillan.

- Coloma, R.S., McElhinny, B., Tungohan, E., Catungal, J.P.C., & Davidson, L.M. eds. 2012 *Filipinos in Canada: Disturbing Invisibility*. Toronto: University of Toronto Press.
- Government of Canada, 2015, Facts & Figures 2015: Immigration Overview <https://open.canada.ca/data/en/dataset/2fbb56bd-eae7-4582-af7d-a197d185fc93>
- Heidbrink, L. 2014 *Migrant Youth, Transnational Families, and the State: Care and Contested Interests*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Hondagneu-Sotelo, P. 1994 *Gendered Transitions: Mexican Experiences of Immigration*. Berkeley: University of California Press.
- Hondagneu-Sotelo, P. & Avila, E. 1997 " 'I'm Here, But I'm There': The Meanings of Latina Transnational Motherhood" in *Gender and Society*, 11 (5): 548-71.
- Lan, P. C.. 2006 *Global Cinderellas: Migrant Domestic Workers and Newly Rich Employers in Taiwan*. Durham: Duke University Press.
- Massey, D., Alarcon, R., Durand, J.& González, H. 1987 *Return to Aztlan: The Social Process of International Migration from Western Mexico*. Berkeley: University of California Press.
- McElhinny, B., Davidson, L.M., Catungal, J.P. C., Tungohan, E. & Coloma, R.S. 2012 "Spectres of (In) visibility: Filipina/o Labour, Culture, and Youth in Canada". in Coloma, et al. (eds.). *Filipinos in Canada: Disturbing Invisibility*. Toronto: University of Toronto Press.
- 長坂格 2009 『国境を越えるフィリピン村人の民族誌：トランスナショナルリズムの人類学』 明石書店
- Nagasaka Itaru and Asuncion Fresnoza-Flot eds. 2015 *Mobile Childhoods in Filipino Transnational Families: Migrant Children with Similar Roots in Different Routes*, Palgrave Macmillan.
- Ogaya, Chiho 2015 "When Mobile Motherhoods and Mobile Childhoods Converge: The Case of Filipino Youth and Their Transmigrant Mothers in Toronto, Canada," in Nagasaka Itaru and Asuncion Fresnoza-Flot eds. 2015 *Mobile Childhoods in Filipino Transnational Families: Migrant Children with Similar Roots in Different Routes*, Palgrave Macmillan.
- 小ヶ谷千穂 2016 『移動を生きる：フィリピン移住女性と複数のモビリティ』 有信堂高文社。
- 大石奈々 2009 「高齢者と移民政策—カナダにおける住み込みケア労働者プログラム (LCP) の事例から」 国際移動とジェンダー研究会編 『アジアにおける再生産領域の再配置とジェンダー再配置』 一橋大学大学院社会学研究科・伊藤るり研究室。
- Parreñas, R.S. 2005 *Children of Global Migration: Transnational Families and Gendered Woes*. Stanford University Press.
- Paul, Anju Mary, 2017, *Multinational Maids: Stepwise Migration in a Global Labor Market*, Cambridge University Press.
- Pratt, G. 2012 *Families Apart: Migrant Mothers and the Conflicts of Labor and Love*. University of Minnesota Press.
- Santiago, M.L. 2009 "Philippine Questions in Asian/Canadian Studies: A Literature Review and Research Statement" in *Quilted Sightings: Gender and Migration: A Women and Gender Studies Reader*. Vol. 1. Quezon City: Miriam College Women and Gender Institute (WAGI)
- Stasiulis Daiva. And Abigail B. Bakan 2003 *Negotiation Citizenship: Migrant Women in Canada and the Global System*. New York: Palgrave Macmillan.
- The Canadian Magazine of Immigration <https://canadianmigrants.com>
- Yeoh, B.& Huang, S. 1999 "Singapore Women and Foreign Domestic Workers: Negotiating Domestic Work and Motherhood". In Momsen, J.H. ed. *Gender, Migration and Domestic Ser-*

「家族再結合」のリアリティー—台湾からカナダに移住したフィリピン人女性とその子どもたちの経験から—

vice, London: Routledge.